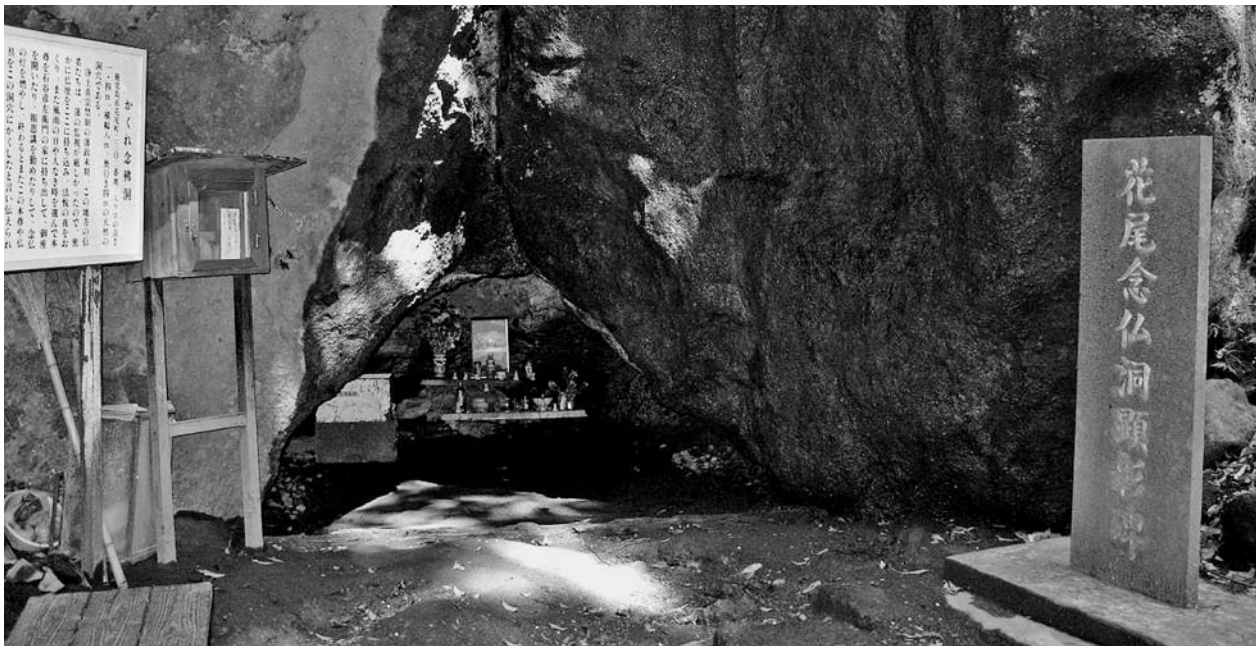
富山 如大地

— 第127号 —

発行人　相良　晴美
発行所　富山市総曲輪２丁目８－29　真宗大谷派富山教務所
編集　富山教区如大地編集委員会



薩摩　花尾かくれ念仏洞

今年３月、解放運動推進協議会の研修旅行で、薩摩のかくれ念仏洞を訪れるご縁をいただいた。真宗禁制下、山中の洞穴などに御本尊を安置して、ご門徒方が寄り集い親鸞聖人の教えを確かめ続けられたという。険しい山道を登って念仏洞を目の当たりにすると、さまざまな想いが湧き上がってくると同時に、そこに念仏申されるご門徒の姿が目に浮かんだ。その姿は、我々に聖人の教えに生きるということを問い、願っているようであった。　（文　第10組　淨光寺　齊藤　弘顕）

さあ、お参りいたしましょう

宗祖親鸞聖人の七百五十回忌御遠忌まで、一年を切ったのですが、どうも盛り上がりに欠けるような気がしています。

十二年前の蓮如上人五百回御遠忌法要への団体参拝で、宿泊した部屋が汚かったとか食事が不味かったとか、いろいろ不満が出たようです。

いつの頃からなのでしょうか、御本山へのお参りが観光になってしまったのは。

団体参拝の募集を、ノルマのように感じてしまうのはどうしてなのでしょうか。

親鸞聖人のみ教えが、私たちのこころに届くとはどういうことなのでしょうか。

そしてそのことが、私たちのさまざまな行為の支えになっていくということは、どういうことなのでしょうか。

今回の御遠忌法要で、「宗祖としての親鸞聖人に遇う」ことの意味が問われているのは、こういうことなのかと思います。そして、そのことの難しさを感じます。

しかしながら、よくよく考えてみますと、私たちにはすでに〝問いつづける〟という道が与えられています。それは〝問いつづける〟に値する大きな問いが与えられている〟ということでもあるのでしょう。

人生を貫くほどの大きな問いがあることを教えてくださったこと、あるいは、教えてくださることへの喜びをもって、さあ、お参りいたしましょう。

第十三組　蓮通寺　河村　浩

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要　２０１１年（平成23年）　厳修
今、いのちがあなたを生きている　差異（ちがい）　つながり・・・そして　いのち　－孤独の闇から響きあう世界へ

二〇〇九年度 第一回住職総合研修 二〇〇九年六月二十二日

現代葬儀の実状と課題―真宗の仏事としての葬儀を考える

葬送ジャーナリスト 月刊「SOGI」編集長 碑文谷（ひもんや） 創（はじめ） 氏

私たち真宗僧侶が執り行う仏事の中で、大きな位置づけにあるその一つが葬儀です。

今日、葬儀のあり方が、特に都市部において、無宗教葬、家族葬、直葬（ちょくそう）などの一般化により大きな変容期を迎えています。そこには家庭の崩壊や経済状況の逼迫、人間の価値観や宗教に対する考え方の変化が背景にあると言われますが、その実状はどのようなことになってきているのでしょうか。

また、私たちは、聞法の機縁が広がることの願いを葬儀に託します。さらに言えば、葬儀を縁として「ともに報恩講をお勤めしていける」ことが願われていると言っても過言ではありません。であれば、真宗僧侶として、どのように葬儀に臨んでいったらこのことが開かれてくるのでしょうか。

二〇〇九年度の住職総合研修では、「真宗の仏事としての葬儀」を考えていく場を開いてまいりましたが、第一回目は、葬送ジャーナリストである碑文谷創氏をお招きし、現代葬儀の実状、葬儀の変遷、現代人の死への関わり方などについてお話いただきました。

『如大地』一二七号では、この碑文谷氏の講義録を掲載し、今後、どのような課題が浮き彫りになっていくのかを、ともに確かめてまいりたいと思います。

■日本の仏教の歴史（一）

碑文谷でございます。よろしくお願い致します。今日はまず簡単に歴史を振り返りながら、私の見方を交えてお話しさせていただきたいと思います。

ブッダが出現したのは紀元前五世紀のインド。大きく仏教はスリランカからビルマ、タイの東南アジアに伝わったパーリ語を用いた南伝系、チベット、モンゴルに伝わったチベット語を中心としたチベット系、そして中国、朝鮮半島、日本に伝わった古典中国語（漢文）を用いた東アジア系、と三つに分かれています。

仏教の日本伝来は、西暦五二二年説と西暦五三八年説とがありますが、最近は百済経由で五三八年に入ってきたとする説が有力です。いずれにしても六世紀に仏教が日本に伝来いたしました。ブッダから日本伝来まで約千年という時間を要しています。

七世紀始めの飛鳥時代に聖徳太子が出て、仏教興隆策をとったことで奈良時代に急速に日本仏教が進みます。

日本での仏式による葬儀は、聖徳太子の葬儀が最初だろうと言われています。以降、天皇の葬儀は江戸時代まで仏教によって営まれてきました。

民衆の葬儀については、一部の聖（ひじり）や遁世僧など、半僧半民の私度僧が行っていました。平安時代までの仏教は「貴族仏教」で、そうした仏教に失望した遁世僧、聖と呼ばれた僧が民衆の中に入っていきます。中でも九世紀の教信紗弥、十世紀の空也は有名です。奈良時代、僧侶は公務員みたいなもので、これを官度僧と言い、これに対して、資格を得ないものは私度僧と呼ばれていました。

当時は、街中で死者が路傍に捨てられていて、そこで私度僧たちが死者を集めて、塚にしたり火葬にしたりしていたと言われています。中世における死者の扱いは、死者を遺棄するという面と尊重していくという面、相反する両側面が見られます。

日本仏教の正系ではなく、民衆の死への係わりは私度僧、遁世僧によったということは重要だと思います。高野山への納骨を呼びかけた高野聖などが有名です。

一方、浄土教の僧侶の中から臨終行儀、葬式を重視する恵心僧都〈源信〉（九四二～一〇一七）らの「二十五三昧会」が現れ、阿弥陀信仰、浄土信仰を盛んにし、浄土教を庶民化する契機となりました。

最澄の天台宗、空海の真言宗は「平安仏教」と言われますが、仏教の教えが民衆のものになる契機は法然、親鸞、栄西、道元、日蓮、一遍等の祖師たち、それに既成であれ明恵（華厳宗）、貞慶（法相宗）、覚鑁（真言）、叡尊（真言律宗）等による鎌倉仏教と言われるものです（厳密にいえば法然による浄土宗は平安末期）。しかし、それがそのまま民衆化したわけではありません。

ちょっと日本史を整理すると、平安時代というのは、八世紀末七九四年に桓武天皇が京に都を移した時から、源頼朝が平氏政権に継ぐ武家政権を樹立した十二世紀末一一八五年までを言います。これ以降、十四世紀一三三三年に鎌倉幕府が滅亡するまでを鎌倉時代とよびます。鎌倉幕府に終止符をうった足利将軍家が京都の室町に幕府を置いたことから室町時代と呼ばれます。

足利尊氏が戒名の院殿号の最初で、江戸時代までは将軍家、大名家にのみ与えられたものとされます。武家政権が権力を担ったことで、現在、院殿号が院号の上位に位置づけられるようになりました。戒名が時代の社会階層を背景とした上下関係を表す典型的な例です。戒名は宗教的なものとされながらも、現在に至るまで社会階層から自由になっていません。「戒名（料）」「院号料」が社会問題化から免れないのは、こうした「仏弟子としての名」とされる戒名に纏わりつく歴史的経緯に目を瞑っていることにあります。

足利時代は、十五代将軍義昭が十六世紀後半一五七三年に織田信長により京都を追放されるまでの時代です。足利政権は十四世紀末一三九二年に足利義満により南北朝統一するまでは安定したのですが、十五世紀後半の一四六七年からの応仁の乱以降、いわゆる「戦国時代」に入ります。「民衆」が力をもったのもこの頃であり、「近世の村」が登場します。この時代が近世揺籃期と呼ばれるもので、さまざまなものが生まれてきます。

この戦国時代が仏教の民衆化、民衆による寺院設立、葬祭仏教の民衆への浸透ということで記念される時代となります。

よく「寺が先か、墓が先か」と言われますが、そうした出自が今もなお、お寺と檀家との力関係に影響しています。共葬墓地にお堂が造られ、寺院となったところは檀家の力が強く、寺院がつくられて、そこに墓地が造られると、寺院の力が強いとなります。いずれにしても、寺院はそれまで貴族や武家を檀那（サポーター）としてきましたが、民衆を檀那とする寺院が多く生まれるようになります。こうした民衆と結びついた寺院の成立を「戦国仏教」と言うことがあります。

■お寺の自立

現在、文化庁の『宗教年鑑』によりますと、全国では約七万七千ヶ寺の仏教寺院があるとされています。ただ、七万七千ヶ寺あるといっても、私の見立ては、財政的に自立しているお寺は、おそらく三割から四割だろうと思います。よく「お寺は儲かっている」と言われますが、それはほんの一部の話です。「限界集落」（高齢化により共同体の機能維持が困難となる地区で、六十五歳以上の人口が五割以上となる集落）などという言葉もありますが、今日、地方の過疎化が進み、そこに相当数のお寺があります。そこでは、当然お寺を支えられなくなってきているということがあります。

経済的に自立できないお寺の場合、兼任をなさっているところがある。一人の住職がいくつかのお寺の住職を兼ねている場合があります。また兼職も多いです。学校の先生や公務員をやっている方が多いですね。

七万七千ヶ寺あると言いますが、財政的な状況から見て、実態としてはこのような状況です。

■日本の仏教の歴史（二）

檀家制度そのものが法制化され、江戸幕府の行政の一環に組み入れられるのは、江戸中期十七世紀後半の寺請制度によるものです。当時禁制とされた「キリシタン」（当時カトリック信者を呼んだ言葉です。「切支丹」とも表記します）ではないことを証明することが建前でしたが、いわば戸籍課の役割を寺院は担うことになります。

また、これ以降、寺子屋的な、あるいは公民館的な地域コミュニティの中心として、寺が地域で機能するようになったということも記憶されるべきでしょう。

元来「枕経」というのは、浄土教においては臨終経を意味していて、亡くなられる方を皆が囲んで念仏して看取るという形でした。仏教版ホスピスだと言われています。

ところが、江戸時代中期になりますと、その枕経が臨終のためのものではなく、亡くなった後の、いわば検死的な機能をもたされるようになりました。亡くなったその人が、禁制とされていたキリシタンや日蓮宗の不受不施派ではなかったかという確認のためなされました。江戸幕府は武家勢力ですが、そのようにして室町中期以降に民衆の中に勢いを増してきた仏教寺院を、その支配制度の中に組み込んでいきました。

そして明治になります。寺請制度が明治維新の神仏分離により法制度的根拠を失うのですが、明治三十一（一八九八）年に家制度を唱える明治民法が生まれることにより、檀家制度＝家制度として補完しあう関係になります。「信教の自由」という個人的権利も言われるのですが、悪い意味でもいい意味でも信仰が家単位とされました。今の檀家制度の基になるようなものがそこにあります。

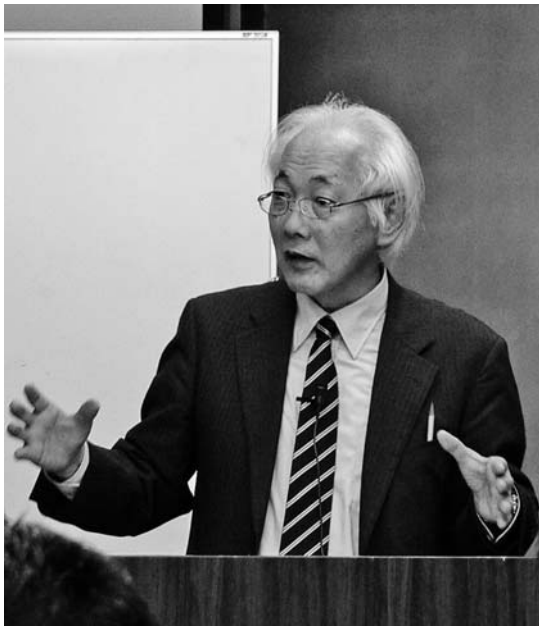
日本仏教は明治に入るまで、仏教と神道、習俗とは、「混淆（こんこう）」つまり混ざり合っていました。「神宮寺」という名の寺院はたくさんあり、これは、お寺と神社を兼ね備えたものです。修験道なんかも神仏習合ですね。それが神仏分離という明治政府の政策で完全に分けられました。もうむちゃくちゃな形で廃仏毀釈が行われました。お寺もだいぶ壊されて、多くの僧侶が還俗させられました。

その廃仏毀釈の中で、その後の「信教の自由」のために働いたのが、両本願寺の方々だったと言われています。両本願寺の方々が、その時に何と主張したかというと、「キリスト教に対抗できるのは我々だけだ」と言ったみたいですね。要するに他の宗派にはそんな力はないと。キリスト教をやっつけるのは自分たちにしかできない。真宗の方たちは昔から元気でした。

結果的には、キリスト教も明治に入ってから、政治に受け入れられました。受け入れられたのですが、このときの「信教の自由」は「カッコつきの信教の自由」とよく言われます。「社会の安寧秩序を犯さない限りで信教の自由を認める」ということですから、いわゆる政治的発言を封じられるような形になっていました。

仏教徒も、江戸期までのいわゆる生活仏教的なものから、体質が変わっていきます。ある意味、「内面的な宗教」「心の信仰」としての仏教に変わっていきます。教理的には純化なのでしょうが、表面の教理仏教と実態としての生活仏教との乖離が進められていきます。

第二次大戦では、ご存知のように、仏教やキリスト教など（一部の宗派を除いて）ほとんどの宗教が国家戦略に加担しました。神社に対する拝礼も皆やりました。国家神道というのは「宗教ではない」と位置づけされました。第二次大戦の時には、陣僧といいましょうか、軍隊に付き添って戦地に赴いた僧侶たちが相当いました。今、当時のことが「戦争協力」だと、いろんな宗派で問題になっています。それは仏教に限らずキリスト教もそうでした。しかし、なかなかそれに触れたがらなかったんですね。戦後となって、すぐに各宗派の指導者が替わったわけではなく、戦争協力のことを批判すると、その指導者を追放することになりますので、その世代が第一線を退くあたりから、各宗派は戦争協力に対して自己批



碑文谷　創 氏（ひもんや　はじめ）

葬送ジャーナリスト。東京神学大学大学院修士課程中退。出版社勤務を経て1990年表現文化社（当時・表現社）設立。雑誌「SOGI」の編集長を勤めるかたわら、死や葬送関係に関する論評活動をテレビ・新聞・雑誌などで展開。『同朋新聞』2006年10月号鼎談。著書には『葬儀概論』（表現文化社）・『死に方を忘れた日本人』（大東出版社）・『「お葬式」はなぜするの』（講談社＋α文庫：新刊）その他多数。http://www.sogi.co.jp/

判、反省を公にするようになりました。

昔のお寺はかなり土地を持っていて、小作をさせていました。土地をもっていることで財政的に保障されていましたが、戦後、農地解放により寺も農地を失います。こういったことでも、お寺は財政的な基盤を失っていきます。近代以降、神仏分離令で破壊され、農地解放で財産である土地を取り上げられた。「仏教迫害の歴史」と言っておられる方が少なくないです。

■都市部と仏教

一九五〇年代の後半から七〇年くらいにかけて、日本は高度経済成長期を迎えます。東京オリンピックの開催や高速道路、新幹線の開通がありました。それを機に日本はすっかり変わりました。一九五〇年頃ですと、郡部に人口の八割の人が住んでいて、都市部には二割の人が住んでいた。一九六五年にそれが逆転しました。現在では都市部に八割、郡部に二割の人が住んでいます。この「都市化」が日本社会を変えました。現在の「過疎化」や農業の継ぎ手がいないということもそうです。郡部から都市部に人口の大移動が行われ、そして地域共同体は崩れていきました。現在では、これまで地域を担ってきた人たちが高齢化してきているということで、その地域共同体自体が成り立たなくなってきました。

都会は九割の地方出身者から成り立っていると言われますが、もともと都会に住んでいた人には、まだ「つながり」はあるのです。東京に来た地方出身の人たちが、見事に「つながり」を切っているのです。いわゆる地域共同体的な付き合いを全くしない。だからよく「東京の人間は」と言いますが、それは「地方出身の東京在住の人」のことなのです。私も東北出身の東京在住者です。そういう地方出身者は隣関係をもたないし、お寺とも関係をもたない。

仏教は、言わば「長男仏教」だと言う人がいます。要するに、地元に長男さえ残れば檀家は続く。それで安泰だと思っている。弟、姉、妹はみんな都会に出て行くわけですね。その人たちの行き先については、お寺はほとんど配慮してこなかった。

仏教寺院では、長男さえ残れば跡取りが残るので安心というような意識があるのでしょうか。地方から多くの人たちが東京に行って、自分でお寺を探すわけではない。お寺を紹介すると、そっちに檀家を取られるという意識があったのかもしれません。そうしたことが、今の状況を作っているんだろうと思います。

実際富山ですと、九十五％くらいは仏教で、さらに真宗はその多くを占めているという状況でしょう。東京ですと、檀那寺をもっている方は、多く見て五割ですね。それもかなり怪しい。前に葬式を頼んだので、そこを一応お寺とするという人を入れて五割。あとの五割は、どこにも属していない。

「あなたの菩提寺はどこですか」と訊くと、田舎にお寺があるという人でも「田舎はもう関係ない」と言うんですね。本願寺派なのか大谷派なのかわからないというのはまだいいほうです。浄土宗と浄土真宗の区別もつかないとか、そんな感じです。大阪はまだそこまでいってませんが、いわゆる「宗教的浮動層」はかなり増えています。

お寺が決まっていない人たちは、葬儀のときにどうするかというと、葬儀社に紹介を頼みます。以前なら葬儀社は、知っているお寺に頼んだのですが、今は僧侶派遣プロダクションが複数できているのでそこに頼むことが多い。

かつては派遣僧には偽僧侶もいましたが、現在では資格を持った僧侶が多くなってきているのが現状です。

派遣僧侶になっている人に過疎地のお寺の僧侶の方がいます。田舎のお寺に家族を残し、単身東京でアパートを借りて住んでいて、プロダクションから仕事を請けている。昔三割、今五割、中には七割、お布施の中からプロダクションが経費として差し引くこともあります。田舎のお寺で葬儀や法事があれば、その時は田舎へ帰る。そしてまた東京に出てくる。だから生活は、派遣僧で成り立っている。地元の寺だけでは生活できていないのです。

僧侶派遣プロダクションの問題で、僕は葬儀社に対して怒るんです。すると葬儀社の人は「一概に悪いとは言えない」と言います。東京のお寺の僧侶に頼むと、えらく権威主義で遺族とまともに口をきかない僧侶が少なくない。ところが、派遣僧の方は遺族の話も聴くし、丁寧に最後まで遺族に付いてい

ってくれる。だから遺族にとっては、派遣僧の方がいい場合があるんだと言うのです。

■戒名料・院号料

戦後、高度経済成長期を迎えたときに、戒名の問題が出てきます。真宗以外の他の宗派では、戒名に「居士」「大姉」や「信女」「信士」の位号がつき、上には「院号」「院殿号」が付きます。

「院殿号」については先述しましたが、江戸時代には、大名家につながる人間だけが「院殿号」をもつという特権的なものでした。差別の歴史があります。もっとも差別があったのはお寺だけではありませんでした。社会全体が階層化されており、寺も例外ではなかったということです。

高度経済成長期に、民衆がお金をもつようになりました。そうすると、「なんで俺にも院号をくれないんだ。檀家総代だから院号というのは差別じゃないか」という話になる。お寺の方も「これまで貢献してきた総代さんと同じように貢献してくれたら、院号をやろう」ということで、「お金を出してくれるのなら、院号をやろう」という話になって、いつの間にか院号料・戒名料というものが広まっていきました。広まったのは、お寺としては、失った土地に換わる新たな財源を確保したかったからです。

大阪の人に訊きますと、「大阪には戒名料はない」と言います。よくよく訊いてみると、「院号料はある」と言うんです。「同じことじゃないか」と言ったのですが、そういうことでお金を取っている。

仏教界では「戒名（法名）料や院号料はない」と言う方がいます。確かに、僧侶の考えによって大きく変わります。でも統計をとると（東京都の例ですが）、みごとに数字に表れます。だいたい、普通の「信士」「信女」が二十万円から三十万円くらいですね。ところが、平均は四十～五十万円なのです。二、三十万円と、その上がだいたい六十万円から百万円といったところが山になっています。平均額を払っている人はほとんどいない。多いか少ないか、どっちかに分かれる。ですから差額の約四十～五十万円が院号料であると推定されます。いくら表向きでは「戒名料・院号料はない」と言っても、現実には横行していることを示すと私は思っています。

■葬儀の変化

今、葬儀が変わりつつあるということで中心的に言われるのは、葬儀の私事化、葬儀の個人化ということです。

日本の葬儀は、高度経済成長期に大きく変わりました。例えば、東京では霊柩車は戦前からありましたが、地方ではだいたい昭和二十八年以降から、宮形霊柩車が走るようになりました。戦前は東京の霊柩運送事業者が自分で製作部門を抱えていたのですが、東京で製作部門で働いていた人が独立して全国に作って売るという会社を設立したのが昭和二十八年だからです。高度経済成長の波に乗って、各地でいろんな霊柩車が走るようになりました。

それと同時に、祭壇が出てまいります。祭壇が一番初めに作られたのは、昭和の初め頃でした。それまで葬儀の中心となっていたのは葬列でした。

昼間に葬儀を行うようになったのも明治以降です。東京、大阪という大都市では明治の半ばを過ぎると葬列がかなり派手になってきました。いろんな葬具がその頃に作られました。

葬列が派手だ、交通を妨害するということで、大正から昭和の初期にかけて葬列の代わりにつくられたのが告別式です。それまで葬列が中心だったのが、告別式になりまして、その告別式の装飾壇として、柩を運ぶ「輿」を象徴して祭壇が出てきました。

江戸時代までは、火葬にしろ土葬にしろ、棺は座棺でした。明治に入って、金持ち層が寝棺に変えて、それが広まっていきました。その寝棺を葬列の時に運ぶのに用いたのが「輿」でした。庶民は使いまわしの輿でした。今の神輿を縦長にイメージしたような感じです。金持ちは、特注してその人専用の輿を作ったので、ほとんど造作がない白木でした。庶民は使いまわしですから彫刻の入った塗物でした。

大隈重信の葬儀のときに、トラックの後ろに、白木の輿を載せて走っています。そしてそれを一体化してできたのが宮形霊柩車です。宮形霊柩車の中で白木が高いというのは、その時代のイメージからなんです。その影響を受

けて、祭壇にも白木が使われるようになりました。

葬列が廃され、出発場所の自宅か到着先のお寺のどちらかで葬儀をするようになりました。戦後ほとんどの葬儀は自宅で行われました。ちょっと大きい葬儀は、お寺でやっていました。

葬儀では祭壇の位置づけが強くなると、寺院方はその宗派に沿った飾りつけや、荘厳を求めるようになりました。そこで祭壇の中心には位牌ではなく本尊をという考え方が出てきました。しかし、高度経済成長期に祭壇がどんどん奢侈（しゃし）化の方向に進みました。

今、全国で自宅葬は約一割です。斎場（葬儀会館）での葬儀は七割という状況です。

斎場（葬儀会館）ができたのは一九六〇年代です。六〇年代にはまだ一部だけでしたが、八〇年代に少しずつ増えてきます。そして、九〇年代になって「斎場戦争」と言われる事態になりました。

葬儀を自宅やお寺で行う場合、だいたい近所の方がみんな手伝われます。近所の方が台所に入ってくるし、お礼をしなくてはいけない。それがいやだということになります。特に女性の遺族が、他人に台所に入られるのは嫌だ。自分は遺族なのにおちおち泣いてもいられない。動いて働いていなくてはならない。もう嫌だ、となりました。

お寺で葬儀をやる場合、お寺ではたくさんの人を抱えているわけではないので、坊守さんに負担がかかる。他でやってもらった方が楽だということもありまして、あっという間に斎場葬が増えていきました。

今では「斎場がないと、葬儀社はやっていけない」という時代になりました。斎場ができたからそういうふうになったのか、家族や地域の関係が変化したから斎場が求められたのか。私は、後者だと思っています。

民法の規定を見ますと、六親等までが親族です。六親等というとかなり大きな集団になりますね。戦後、民法は変わり家制度がなくなったと言われますが、現在の民法でも昔の大家族を許容するぐらいの幅をもっています。しかし今、葬儀に行きますと、親族が少ない。要するに親戚のつきあいが非常に弱くなっています。

高度経済成長期以降、企業共同体が葬儀に加わるようになりましたが、バブル崩壊以降、企業の葬儀への関与が弱くなってきています。以前は、地域のつながりが壊れても、葬儀の手伝いは、会社の人や取引先の人がやっていました。ところがバブル景気が崩壊すると、終身雇用というものがなくなりました。企業共同体というものもなくなってまいりました。

企業共同体を象徴するものは、高野山に行くとよくわかります。高野山には、松下電器のお墓とか一流企業のお墓があります。それは、その会社に貢献した人たちを弔うお墓です。しかし、もう企業共同体などという言葉自体が廃れました。

日本の葬儀は、戦後の高度経済成長期に大きく変わりました。一つには祭壇が中心になったことです。バブルの頃は、祭壇の大きさを競うようなこともありました。

しかし、今遺族は、祭壇の大きさはもうどうでもいいと思っています。宮型霊柩車はもう見当たらない。約三割です。代わりに洋型霊柩車が使われましたが、今は、病院下げに用いたバン型車が火葬場送りにも一般的に用いられる時代になりました。

高度経済成長期に「葬儀・告別式」という形態になりました。要するに、葬儀と告別式を一つにしたものです。葬儀というのは宗教儀礼で、故人との別れが告別式。それを一時間でまとめてやろうということで、葬儀式の途中から焼香が始まるようになりました。

その「葬儀・告別式」さえも、いよいよなくなろうとしています。もう、「通夜・告別式」になっている。東京では葬儀の日には、近親者と故人に深い関係のある人しか来ません。一般の参列者は、みんな通夜に来ます。通夜の方が多いです。だから「通夜・告別式」です。葬儀の日はもう近親者しかいないので「告別式」は実態的にもうありません。

■葬儀ホール

今、人口は減少気味ですが、世帯数は増えていますね。少子化になり、高齢者層が増えることで死亡者数が多くなってきていますから、人口は自然減に入っています。世帯数が増えているのはなぜかというと、単身世帯がどん

どん増えているからです。若い人間だけじゃなく、高齢者も含めて、単身世帯がものすごく多くなっている。つまり、家がどんどん縮小しています。

今、自宅で亡くなられる方は、全体の十二・一％です。一九七〇年頃は、まだ五十％近くあったんです。今は病院で、最期を少人数の家族で看取る。中には看取る家族がいないことさえある。ちょうど二〇〇〇年頃から変わりました。

昔は病院で亡くなったあとは、お寺で葬儀をする場合でも、いったんは自宅に遺体を運び、安置しました。そして、翌日お坊さんの立ち会いのもとで納棺をしました。現在、自宅に戻るケースが少なくなっています。

今は、ほとんどが病院でごく少数の家族で看取ります。そして、遺体を家に連れて来ないので、孫なんかはろくに死者の顔を見ないうちに葬儀が終わるということが少なくない。葬儀の時に棺を開けて、お花を入れたりすることもありますが、それもしないケースがあります。遺族ですら、きちんと遺体に接することが少なくなってきました。

自宅で葬式をしていた頃は、葬式に行く機会も多かったのです。自宅で葬儀をするということは、近所の人が手伝うということで、その家の内情までわかる。ということは、死者が出た家の人は、精神的にもかなりきついようだということが近所の人にはわかる。地域のコミュニティが主体となって葬儀をするのは、なにも日本だけではありません。死というのはその家族を打撃する。そうすると、そこが弱くなる。だから、弱くならないようにみんなでフォローし手伝う。それがコミュニティでの葬儀なのです。

今、近親者の葬儀もろくに体験しなくなりました。葬儀というのは、看取るということから始まる、近親者の死を受け止めるプロセスだと思います。葬儀に出たからといって、ただそれだけでは葬儀を体験したことにはならないと思います。それが近親者ですら、そういう具体的体験がない。そういう時代になってきました。

■阪神・淡路大震災

一九九五年頃から「家族葬」が増えてきました。一九九一年にバブル景気が崩壊しました。それでも、すぐには悪くなったという実感はありませんでした。景気が悪くなったということが実感されてきたのが一九九五年頃です。

そこで阪神・淡路大震災が起こります。阪神・淡路大震災というのは、日本人の死生観に、相当な影響を与えたと言えます。

神戸では、「ここの病院では十分な治療ができないから、大阪とかに転院してくれ」といっても、患者が動こうとしないケースがありました。それは、家族が死んでいるので、葬儀をしないでは神戸を離れられないという気持ちからです。

長田地区は、火事で一面焼け野原になりました。そこでは、切れ端みたいな小さな板切れの上に、水を入れたペットボトルとお花を挿した牛乳びんを置いたのがあちこちで見られました。ろくに葬儀もできませんでした。震災直後に現地に入ったのですが、そこで亡くなった家族を弔う、その小さな祭壇が眩（まぶ）しく見えました。

あの時は、仏教界でも多くの僧侶の方々がボランティアで現地に入って、火葬場の前で、宗派関係なく、亡くなった人一人一人のために読経しました。他の地区で合同の追悼会があると、そこに遺骨を持って行って参加させてくれとか、そういう風景があちこちで見られました。いつ誰がどこで、どういう形で死ぬかわからない。それを見せつけられたのが、阪神・淡路大震災でした。世界的には、九・一一の影響が強いと言われますが、日本人には、阪神・淡路大震災の方が大きい影響を与えたと私は思います。

■超高齢社会と家族の変化

高齢者のことが、大きな問題になっています。人口全体の中に六十五歳以上の高齢者が占める割合を高齢化率と言いますが、七～十四％を「高齢化社会」、十四～二十一％を「高齢社会」、二十一％以上を「超高齢社会」と国連の報告書で分類されています。今、テレビや新聞で、まだ「高齢化社会」と言っている例を見ますが、現在の高齢化率は二十二％を超えています。日本はもう世界で一番の「超高齢社会」です。「高齢化社会」の時代は、とうに

過ぎています。

真宗では、年寄りの方が亡くなると、お赤飯を炊くところが多いのではないでしょうか。真宗に限らず、お赤飯を炊いた地域が結構あります。これにはいろんな説がありますが、最近は、そのお赤飯が黒飯になっているんです。お葬式だから赤でなく黒だと。これは最近の考え方で、元はお赤飯だったのですね。長寿を祝う、長寿にあやかろうということで、高齢の方の葬式には、赤飯に限らず、一種のお祝い的なものがありました。

昭和の初めの頃の死亡者数のデータを見ますと、八十歳以上の死亡者数が全体の死亡者数に占める割合は、せいぜい五％ぐらいです。それが今日では四十七％です。もうすぐ五十％を超えますよ（二〇〇七年にすでに五十％を突破した）。もうそういう時代です。これまで日本人が体験してこなかったことを、今体験しているんですね。

今のおじいさんおばあさんと、その前の代とではずいぶん違いまして、以前は、嫁が年寄りの面倒を看ていましたが、今データを取りますと、むしろ嫁よりも、実の娘が面倒を看るというケースが多いようです。もう全国的にそうです。昔は「嫁に行く」と言いました。「娘だと家の跡継ぎになれない」と言われましたが、今では苗字が変わろうが、娘のところに年寄りは平気で行きます。だから「子供は男子か女子か、どちらがいいか」と訊いたら、「男子がいい」と答える人は少ないです。だから「家の跡継ぎ」という観念は、ほとんどなくなってきている時代です。

真宗では家族を大切にされると聞いております。各家には仏壇がある。しかし、家族の変化にもきちんと対応していかなくてはならないと思います。結婚する先に小さな仏壇を与えるように勧めているお寺があったように思います。家族が遠くに行ってしまう、分散するということも普通に考えていかないといけなくなると思います。

今、六十五歳以上の世帯の五十二％近くが、単身者か夫婦のみ世帯です。三世代世帯というのは、全体の四分の一くらいしかいません。ということは、老いを看取るのが配偶者という例が多い。男性は平均寿命が短いうえに年長の例が多いので、自分の死後のことを考えないと言われます。しかし、逆転が起こる可能性がずいぶんある。夫が妻の介護をし、看取るケースも多くなっています。男性の独身も多い。妻と死別した夫は、三年以内に死ぬ確率が非常に高い。女性は、一年くらいは悲しみますが、後はもう以前よりも元気になるという例が少なくありません。男性は弱いですね。

葬儀が変わってきたことの原因の一つに、家というものがかなり怪しいものになってきたということがあります。この前、ある人から問い合わせがありました。弟の遺骨を自分の家の墓に入れようと思い、住職に相談したら、「弟の家はあなたの家とは別だから、それはだめだ」と住職が言ったということです。戦前は大家族でしたから、兄弟がいっしょの墓に入るなんてことはよくありました。北陸には、一つの村で一つのお墓というのがあったりしますから。この住職は、戦後の考え方です。家を核家族単位で考えています。

■新しい形のお墓

六〇年代以降、次男、三男は地方から都会へ出て行く例が多い。そうすると別の家になる。だから、次男、三男はもう一つ墓を建てて別に檀家にならなくてはいけないという考えです。

皆さんのところでもお寺の墓地の使用規則というのがあるかと思いますが、お寺の使用規則においては、檀信徒・門徒さんであるということが条件になると思います。お寺の墓というのは文化庁の管轄です。というのは、お寺の境内内墓地は「宗教施設」だという考えからです。その他の公営や民営の墓地は厚生労働省の管轄になっている。お寺の墓地というのは、あくまでその寺の檀信徒用、門徒用に供されたものという位置づけです。

お寺の墓でも、「宗旨不問」というのは「民営墓地」になります。東京では、民営墓地が一九七〇年代以降にたくさんできました。公営の墓地があって民営の墓地がある。民営の墓地というのは、ほとんどどこかのお寺の名前が冠してある。東京に築地本願寺の西多摩霊園という大きな霊園があります。そこには築地本願寺という名前が付いていますが、民営霊園に位置づけられます。

首都圏では、民営霊園と宗教施設の寺院境内墓地との境目が、だいぶ怪しくなってきています。というのは、入檀料を払って檀家になるならお寺のお墓に入れる、というものがあるからです。こっちのほうがよっぽど事業型じゃないかと思うのですが。宗教法人の公益性についても、いろいろ問題になってきています。

今、「娘が跡を継ぐ」ということが多くなりました。しかし、七〇年代、八〇年代は、「子供が娘だから墓を継げない」という相談が結構ありました。それをきっかけの一つとして「永代供養墓」が出てきました。永代供養墓というのは、跡継ぎを必要としないお墓です。永代供養墓が出てきたときに、お寺の方が、「そんなの新しくないじゃないか。うちにもあるよ」と言っておられた。でもそれは、無縁塔という形であったわけですね。無縁塔というのは、入るお墓のない、「気の毒な人」のお骨を納めるところです。

永代供養墓というのは、（最初は比叡山に作られましたが、社会化するのは）一九八九年くらいから出てきました。一人一人の生き方を尊重する。その結果、単身であろうが離婚していようが事情はなんであれ、一人一人の生き方を尊重して受け入れますよ、というものです。今では跡継ぎの息子一家がいても入る、という人が出てきています。

永代供養墓も最近増えてきて、今全国で約六百ぐらいありますが、実態は怪しげな永代供養墓も多いです。その永代供養墓を公営でやったのが、「合葬式墓地」とか「合葬墓」というものです。供養という言葉は宗教用語だから、公営では使えない。だから合葬式と言います。これは今、人気です。

今、地方では無縁墳墓が多くなり、墓地が虫食い状態になってきています。もうひどいです。ただし、東京ではどうなのかというと、バブル景気の頃まではお墓はすごく売れていました。ところがバブル景気が破綻して、売れ行きがばったり止まりました。それで、「永代供養墓は売れるらしい」とのことで、無縁塔の化粧のし直しをしてみても売れません。

亡くなる人のうち、だいたい全体の七割は入る墓地があるが、残りの三割の人はありません。高齢化していきますと、死亡者数が増えますね。現在、年間死亡者数は百十万人というとこです。これが将来、最大で百四十万人から百六十万人になると言われています。そうすると、墓地が足りなくなる。墓石業者も霊園業者も厚生労働省も大騒ぎしました。私は一九九〇年に、「そんなことはない」と言い、その予想は当たりました。要するに、一つは墓地の多様化が進んで、永代供養墓がありますし、散骨（自然葬）、樹木葬墓地とか、そういう多様な形態が現れてきています。そしてもう一つは、自宅の庭に遺骨を埋めることはできないが、自宅に置くという選択肢があるわけですね。葬儀と違ってお墓は慌てる必要がありません。

■お墓に納めない遺骨

高齢者の二人世帯や単身世帯が多いと言いましたが、夫婦のどちらかが亡くなった場合に、よくお寺や墓石業者は「四十九日までには納骨しなくてはいけない」と言います。あれはおそらく全く根拠のない話だと思います。

四十九日までに納骨というのは、後飾り壇を用意するのは四十九日までで、そこに遺骨を置いていたが、後飾り壇を取ってしまうと、遺骨をどこに置いていいのかわからない。じゃあ納骨するか。四十九日にはみんなが集まるからちょうどいいとなり、それで「四十九日までには納骨を」ということを誰かが言い出しました。

高齢者の夫婦の世帯で連れ合いが亡くなると、「自分が死ぬまで遺骨をそばに置いておきたい」という人は結構多いんです。他人の遺骨だと思うから怖いと思うのであって、家族の遺骨というのは、実は愛しかったりするわけです。ですから今、「手元供養」というのが流行っています。

石原裕次郎さんが亡くなった時に、「湘南の海が好きだったから、そこに散骨したい」という話もあったとのことですが、当時は、散骨は刑法一九〇条の遺骨遺棄罪に当たるかもしれないということで、散骨はしませんでした。その後、一九九一年に、「葬送の自由をすすめる会」が散骨を「自然葬」と言って行いました。その後、「遺骨を遺棄する目的ではなく、葬送を目的として、相当の節度をもって行われるな

らば違法ではない」という法解釈が有力になっています。「葬送を目的とした」というのは外見からは判定できないので黙祷やらの儀式を一般的には行います。「相当の節度をもって」というのは、遺骨を細かく砕き、原型がわからないような状態にする。そして、人が嫌がらないところ、例えば生活用水として使っている川とか海水浴場、養殖場の近くなどは避けて、海の沖の方とか森の奥とか、そういうところで行うようにするということです。

石原まき子さんが、夫裕次郎さんの遺骨の一部をペンダントにして、今も首にかけていらっしゃるようです。あれがおそらく「手元供養」の始まりだと思います。今、「手元供養協会」というのもあります。遺骨をダイヤモンドにしたり、小さなお地蔵さんの形にして仏壇の中に置く。仏壇がなくてもその辺に置いておく。いろんな形があります。亡くなった人に対する愛着が、そういう形となって現れてきています。真宗だと「遺骨にこだわるな」と言うのでしょうが、むしろそうしていたいという人が結構増えています。

■がんばれ仏教

『がんばれ仏教!』という上田紀行さんの本がベストセラーになりました。上田紀行さんは、東京の曹洞宗の青松寺というお寺で、曹洞宗の若い連中を中心にした塾をやっています。そこの言葉に、「ボーズ・ビー・アンビシャス!!」とあるんです。今のお寺は元気がないというんですね。『がんばれ仏教!』の中に書いてあったのですが、ある仏教関係の大学に行っているお寺の子供が、「友達の話を聞いていると、どうも今のお寺に葬式を頼みたいと思う人はいないんじゃないか」という話をしていました。

そして、長野県松本市の臨済宗の神宮寺の高橋卓志さんが、『寺よ、変われ』という本を出版され、これもかなり売れています。高橋さんは、「葬式仏教と言われていたが、このままでは寺に葬式すら頼まれないような時代が来るんじゃないか」と言っています。

檀信徒、門徒ではあるけど、あまり深い関係はない。門徒さんといろいろお付き合いがあって、その方の葬儀をする。生前を知って葬儀をするということが基本だったと思うのです。

亡くなって初めて会うに等しい人の葬儀をする。そういう葬儀というのは何なのか、ということが問われるようになってきました。やはり信徒・門徒さんとの関係、生前の付き合いがあって、その人の葬儀をする。生前を知っている人の葬儀と、全く知らない人の葬儀をするのとでは、明らかに違う。東京では五割ほどが宗教的浮動層です。少なくとも半分が生前を知らない人の葬儀なのです。

私が、静岡のそんなに都会ではないところの住職から聞いた話です。年寄りのお坊さんが若いお坊さんに向かって、「御膳料なんかもらってくる」と嫌味を言っているそうです。

「御膳料」なんて昔はなかった。葬儀では、僧侶は最後の「お斎」までいるのが当たり前だった。ところが、今の若い僧侶は、そのあとの食事の席には出ないで帰っていく。話をするのがいやみたいで、お経をあげたら帰っていく。そうすると食事を出さないから、その代わりに「御膳料」を渡します。

■葬儀の歴史

日本人の民衆の葬儀の原型を作ったのは禅宗だと言われています。中国で禅宗が儒教などの影響を受けて、「禅苑清規」を作りました。その中には二つの葬儀が出てまいります。一つは、僧侶の葬儀「尊宿喪儀法」です。「尊宿」というのは「僧侶」のということです。そしてもう一つは「亡僧喪儀法」です。「亡僧」というのは、修業途中に死んだ人のことです。僧侶の場合は、引導を渡す必要はなく、さっさと葬儀をしてしまえばいいと。しかし、修業途中の人には、まだ修業が足りていないから、戒を授けて僧名を与えて、引導を渡してから送り出す。それで僧名を与えるのだから、それが戒名だと。それが「在家喪儀法」に転じました。

日本では真宗を除き、その禅宗の喪儀法が基本になり、在家の葬儀を行うようになります。ですから、真宗以外の方では、授（受）戒が葬儀では重要になります。今、剃刀を当てる所作をしますが、江戸時代には、男性も女性も本当に剃っていたようです。明治以降、剃らなくなって形だけ残ったみた

いです。

戦国時代に、民衆の中に仏教が入っていった。なぜ民衆が受け入れたのかというと、曹洞宗の佐々木宏幹（こうかん）先生は、「民衆の霊魂観と、仏（ほとけ）という言葉が、死者を指す言葉と仏（ぶつ）を指す言葉と重なっている。それを混合してそうなったんじゃないか」と考えておられます。

佐々木宏幹先生の言われることを私なりに要約すると次のようになるでしょう。

「たとえば葬式の対象である死者は『ほとけ』と呼ばれるが、この『ほとけ』の概念には『仏・覚者』の意味と『タマ』とが複合している。つまり仏教と民俗とが『ほとけ』の中には含まれている。だから、お坊さんは葬儀を通して人々を『仏』の方に導くことができるし、また『タマ』の方にどっぷりつかることもできる」

私は一つの仮説をもっています。

戦国時代までは、民衆は葬儀をしなかったわけではないが、それまでは、僧侶は民衆の葬儀をやらなかった。それをやるようになったということは、その民衆の一人一人を、人格あるものとして認めたということではないかと私は解釈しています。

「人格をもった存在」というのは、非常に近代主義的表現になります。奈良時代の「薄葬令」では、民衆の死というのは、ごみみたいに考えられていました。街の通りには遺体を捨てるなとか、それくらいの書き方です。

昔は、日本は風葬が多かったようです。もちろん土葬もありましたが、中世までは風葬が多かった。ですから、山の麓とか洞窟の中に遺体を置いてきて、そして骨化するのを待ったと言われています。自然から来たものだから自然に帰していた。それが、一人一人の葬儀をして葬るということをしたということは、ある意味で民衆の人格を認めたということではないでしょうか。それが檀家、門徒と寺という形になったのではないかと思っています。

私の事務所の近くに二階堂行邦先生（東京教区専福寺前住職）のお寺がありますが、今日先生の本を読みながらこちらへ参りました。その中で先生は、真宗の葬儀というのは、信仰共同体の葬儀であり、その信仰共同体が今なくなってきたとおっしゃっています。

今、家族や地域がどういう状態にあるのか。お寺というのは、これらとの関係をどのように構築していくのか。結局、世間を嘆いてみてもしょうがないですね。

葬儀という場所には死者がいる。ですから、今も昔も、家族は精神的にも生活的にもダメージを受けていますから、地域共同体が手伝ったんです。

その地域共同体が弱くなって手を退いた後、葬儀社が出てきた。これから役割が期待されているのに、僧侶もコミュニティと一緒に手を退いてしまうとはいかがなものかと私は思います。

■死を受け入れるプロセスとしての葬儀

昔の臨済宗の葬儀は、人が亡くなってから行われていた一連の儀式の流れを追う形で行われます。人が亡くなって枕直し、つまり安置から最後の火葬まで、ちゃんと葬儀のプロセスがわかるんです。

私は、昔の葬儀は僧侶がずっと係わって行われていたことを示していると思うのです。しかし、葬儀の式次第を見ると、今はそれを一時間で済ませてしまいます。だから、私は、臨済宗の会合に行ったときに、「臨済宗は手抜きだ」と言いました。「僧侶は係わっているつもりかもしれないが、数日かけて行われたプロセスを一時間でまとめてやるなんて、どういう了見なんだ。遺族のことを何と考えているんだ」と。

葬儀というのは、プロセスだと思うんです。最近、「葬儀をしないのがおかしい」とか「儀式文化を大切にしよう」と言われますが、私はそういう考えには反対なのです。そのプロセスがあって、葬式がある。葬儀式のその一時間、それだけに意味があるわけではないでしょう。

昔の日本人の考え方では、通夜までは香典を持って行かなかった。通夜には喪服を着て行かなかった。つまり通夜までは、亡くなった人を死んでいない人として扱っていたのです。変だと思われるかもしれませんが、遺族の立場になってみれば分かります。医者が死亡宣告をしても、遺族がすぐにそれを受け入れるというものではないのです。受け入れるのに時間がかかるんで

す。通夜というのは、一晩だけではなかったようです。いろいろ手を尽くしたのだが、やっぱり亡くなったということで、蘇生を断念して死の事実を受け入れてお葬式をあげました。

お棺の蓋に釘打ちをするという習慣があります。あれは、死霊を封じるという誤った民俗であると真宗では嫌がりますが、別の解釈もできると思います。あれは断念を表しているのだと思います。もう死んだんだと、遺族が納得するために行なわれているのではないでしょうか。

考えてみれば、お葬式や一連の儀式というのは、死んだんだ、死んだんだ、ということを周りの人々に繰り返し伝えようとしている。納棺するのは死んだから納棺するのであって、死んだんだ、死んだんだ、ということを言っているわけですね。

■死と向き合う

グリーフワークは、「喪の作業」とか「悲しむ作業」と訳します。遺族が行う作業です。グリーフワークで一番の基本となることは、死の事実を見つめること、認容することです。

日航機が御巣鷹山に墜落するという事故がありました。遺体が寸断されたような状態で発見され、付近の学校の体育館に運び込まれました。ある男性の遺体を確認するために、その男性の妻が行こうとした。ところが、「配偶者は行かない方がいい」と周りの人に止められて、その連れ合いの方は遺体確認に行かなかった。しかし、実際に遺体確認に行った人もおられます。どっちの方がきちんと死を受け止められたかというと、実際に遺体確認に行って、自分の目で確認された方なのです。遺体を見なかった人の方が、いつまでもその事を引きずっていたようです。

葬儀の中心というのは、その人生を含めて、その人が死んだんだということをどう受け止めるのか、どう向き合うのかということだと思うのです。葬儀を、真宗では「亡くなった人を機縁とした聞法の場」と位置づけると言いますが、私はある講演で呼ばれたときに、本願寺派の方と喧嘩をしました。「葬儀は死者のためにやるんじゃない」と言われまして、「死者のためにやるんだろう」と私は言ったのです。

「人が死んだんだ」という事実に向き合うこと以外は、やるべきじゃないと思います。キリスト教会の葬儀でもそうです。そこでキリスト教の宣伝なんかしたところで、みんないやがるだけで意味がない。その人が死んだということに単純に向きあうことが大切なのだと思います。

法話の中で、経済の話をした僧侶がいました。僧侶でも牧師でも神職でもいいのですが、話すかどうかよりも、何を話すか、どう話すかということが大事だと思うのです。

自死という問題があります。それについて、キリスト教でも仏教でも、「生命を大切にしなければならない」という説教をしていたとすると、とんでもないことです。まずその人の死をきちんと受け止める。そこから始めるべきなのに、その死者の方の自死を批判する。価値判断を押し付ける説教をするというのは、もう宗教としては最低だと思っています。一人一人の生き方を、それがどんなものであろうと、きちんと受け止める。葬儀というのは、まさにそういう場であると思います。

■四十九日

葬儀の後には、初七日・四十九日などがありますが、これはインドから入ってきたものです。インドから中国に入りまして、百ヶ日と一周忌と三回忌が加わり、それらが日本に入って来ました。日本では、七回忌・十三回忌・三十三回忌が加わりました。真宗では五十回忌までおやりになるようですが、あれは後で作ったものです。

四十九日というのは、日蓮宗や曹洞宗などでは、亡くなった人が修行している期間だと言います。死者の霊は、しばらくは、四十九日間はそばにいる、という民俗信仰との融合が見られます。

しかし、ヨーロッパやアフリカでも、一定期間、喪に服すという習慣があります。何も四十九日は仏教や東アジア由来のものとは言えない。死者を抱えた家族は、いろんなダメージを受けていますから、それを周りが保護する。だから、一定期間を喪に専念することを保障するというのは、人間社会としてはごく当り前のことだと思います。

穢れの中にいるのだから忌むべきだということで、忌中として一定の期間

を設けます。「忌む」ということからはそろそろ脱却すべきかと思いますが、死者の近くにいる者の悲しむこと、喪をし、弔うことを保障することは極めて大切だと思います。また、そういう共通理解があったから、四十九日というのは日本人の中に受け入れられたのだと思います。四十九日間を、人々が必要としたのでしょう。

■グリーフケア

今までグリーフ（死別の悲嘆）ということを、日本人はあまり言いませんでした。日本の仏教者は、葬儀の目的の中にグリーフということを、あまり位置づけませんでした。

グリーフというと、「最近の人間は甘えているからだ」と言うような人もいる始末です。家族が悲嘆にくれるばかりでなく、怒ったりイライラしたり、人間の感情のコントロールが効かなくなったりしてしまいます。葬儀の間しっかりしていた人が、後になったら何も覚えていなかったということがあったりします。それは病気でも何でもなく、ごく当たり前のことで、人間関係の喪失がもたらすものです。克服すべきものでは決してない。

私は、葬式仏教は否定する必要はないと思います。死の局面に係わることができるということを基本にした関係というのは、相当に強い関係です。だから、それだけで終わるはずがない関係だと思います。

今私は「前葬儀」というものを提言しています。「葬式の前」という意味です。何かというと、亡くなったら枕経をあげに行く。そこで、家族や葬儀社の人と一緒に、葬儀をどうするかを話し合う場をもったらどうかということです。

そこで死者への想いとか、どのように家族は送りたいと思っているのか、そういうことを聴いたうえで、みんなで葬儀を考えたらいいのではないか。死んだ人のことをよく知らなくても、その人のことを聴いて、葬儀をするのでないと、葬儀が意味をもたないと思います。

僧侶は、葬儀の前線に行きますよね。俺達はそれをやれる人間だから、他の者はじゃまするな、という感じがします。私は、一番大切なことは、死者をきちんと理解して、その家族の弔う気持ちを尊重して送り出すということだと思います。

私は、僧侶は主役じゃないとはっきり言っています。葬儀社が主役なわけでもありません。主役は、亡くなった人であり遺族です。「遺族のために葬儀を行う」というのは極めて客観的な理解です。でも、遺族のためにやったのでは、遺族のためにならないのです。死者に照準を合わせて、その死者のいのちを受け止める、ということをやらないと、遺族に寄り添うことにならないのです。

■葬儀への提言

初七日を、葬儀の当日、火葬が終わった後、やることがあります。繰り上げ初七日としてやります。これは勧められる話ではありませんが、全国的に一般化しています。地方によっては、「骨葬」と言い、火葬してから葬儀をするというのがあります。

近年、問題だと思うのは、首都圏では、葬儀が終わって、みんながいる前で出棺前に初七日が始まることがあります。それから出棺になる。誰がこんな馬鹿なことをやったのだと思います。葬儀社が片付けを早くやりたいからそうやったのか、遺族が火葬後に早く解放されたいからなのか、宗教者が火葬場に行かなくても済むようになのか。どれが正解なのかわかりませんが、ある大手葬儀社がそれを標準にしたときに、こんなばかげたことを、僧侶の方がよく許しているなと思いました。そんなことだったら、初七日自体をやめたらいいと思います。

私はキリスト教徒なんですが、最近は僧侶の方の仲間が多くなりまして、その方たちといろいろ話をします。今、お寺で葬儀をされることが少なくなってきています。ところが、小さい葬儀ならお寺で出来るじゃないかと思います。葬儀社が後片付けや掃除をすればお寺の方の負担も軽減できるでしょう。お寺だったら、本堂に荘厳が整っていますから、そのまま、あるいは両脇に生花を一対飾るだけで、十分なお葬式が出来ると思います。

天台宗の葬儀法などを見ておりますと、棺は内陣に入れないで外陣に置きます。葬列がお寺に着くと、お棺をそのまま本堂の外陣に置く。あるいは本

堂の外に置いて、そして僧侶の方が後ろを向いて本尊を背にして引導を渡す。それは理屈だろうと私は思います。昔は死の穢れ意識が強くて、お寺も穢れ意識をもっていたから、お棺を内陣に入れさせたくなかったのだと思います。

死者をきちんと受け止めるということは、そういうことを変えていくことではないかと思います。だからそういう昔からのことでも、いろいろ理屈があるのかもしれませんが、今一度疑ってみて、どうあるべきなのかを考えてみる必要があると思います。「昔から真宗はこうだった」ではなく、これはもう真宗だけではなくて、みんな他の宗派もそうです。そして忘れてならないのは、死の穢れということです。死の穢れの意識というのは、真宗が一番反対してきています。そのことを、今一度考えていただきたいと思います。それとも、死者はお寺に入れてはならない何らかの理由があるのか、確かめる必要があると思います。

叱られるのではないかという話を最後にしまして、終わらせて頂きます。失礼致しました。

質疑応答

■直葬（ちょくそう）

意見　私の体験した直葬について申し上げます。何年か前に門徒のおじいさんの通夜と葬儀をやりました。その時にお参りに来られた方が「自分が亡くなったら、そちらでお通夜と葬儀をやって欲しい」と言われました。その後、その方が亡くなられたという連絡があり行きましたら、セレモニーの方とご遺族が打ち合わせをしておられ、万事繰り合わせておられました。しかし、お寺に帰ってきた後に、ご遺族の方が来られて、葬儀と通夜は取りやめにしますと申されました。私は理由を聞かず了承しました。後から聞いた話では、葬儀の費用が二〇〇万円以上かかると言われたようです。息子さんが「病院の支払いもまだで、母親の生活費もあるのに、こんなことはできない」と言って中止になさったそうです。納骨を済ませて、後でお連れ合いが「こんなにさみしいお葬式はない」と親類の方に言われたそうです。

直葬というのは、大都会では三割ほどにまで増えてきているそうです。大都会で広まったことが、地方に波及してくることは、火を見るよりも明らかです。

■葬式をする意味がわからない

質問　「グリーフサポート」の意味と、本日の資料の中に「『千の風になって』の流行と問題点」とありますが、これらについて詳しくお教えください。

碑文谷氏　「直葬」というのは「葬式をしない」ということですが、東京二三区では三割くらいにまで増えています。これには、一つには経済的な理由があります。もう一つは、葬式をする意味が分からなくなってきたということがあります。戦後の高度経済成長期に葬式を派手に行い、社会儀礼化が進みましたが、これは戦時中、戦後の混乱期に、身近な死者をろくに葬ることができなかったという悔いもあってのことでしょう。しかし、今では葬式に対してあまり熱心ではない、こだわりがないですね。死に対してびっくりしない。死を早く忘れてしまおうというような感覚があって、人の死を一大事と見ない、家族の死でさえも。

■グリーフサポート

「グリーフサポート」は、「グリーフケア」とも言われています。「グリーフ」というのは「喪失に伴う悲しみ」です。恋人を失うとか、自分の大切なものを失ったときに出てくる、喪失に伴う悲しみです。「ケア」ですと（ケアという用語が問題なのではなく、しばしば使用する人が）「その人達を癒してあげよう」という、どうしても上から目線になりがちなので、「サポート」の方がいいのではないでしょうか。その人の悲しみに耳を傾けて聴く。何か特別なことをするわけではなく、傍らにいてその人に寄り添うということが最も大切なことです。

昔は、親族がその役割をしてきたのでしょうが、今はそういう人がいなくなってきたという問題があります。今後、僧侶の方たちがどのような形で葬儀に関わるのか。私は、できるだけ遺族の言われることを聴く時間を長くとってもらいたいと思っています。

「千の風になって」では、「お墓にはいません」というので、仏教界の方が批判されていますが、そこは批判する所ではなく、問題は「死んでなんかいません」というところです。気持ちはわからないでもないですが、風になって生きていることにしています。ちゃんと死の事実を捉えるところから出発しないといけないと思うのです。死の事実をあいまいにしているところが問題だと思います。僧侶の方が係わる時、亡くなったという事実を家族とともに共有する場を作る必要があるのでないかと思います。

■プロセスとしての葬儀式

質問　具体的な「家族の死」を受け入れていくような、そういう葬儀が願われているということでしょうか。それは、現在の葬儀がそうなっていないということを言われているのかと思います。儀式にもプロセスがあって、それでこその儀式であって、プロセスのない儀式には意味を感じられないというお話しであったかと思います。であれば、私たちは具体的にどのようなプロセスを回復していかなければならないのか、お聞きしたいと思います。

碑文谷氏　私は儀式というのは非常に重要だと思っています。ところが、プロセスを全部棄てて儀式だけをやることは、儀式として機能しないということです。儀式が無駄なのではなく、プロセスがちゃんとあって儀式がある。先ほど、前葬儀と枕経とを重ねてお話ししましたが、枕経の時は亡くなった直後ですね。家族としては大変不安定な状態です。そこでお経をあげるとともに、家族の話をきちんと聴く場にして欲しいと思います。そのことから僧侶が葬儀に係わっていくのであれば、意味のある葬儀になると思います。家族三人の葬儀で、今まで知らないお坊さんだったが、火葬場に一緒に行って、話を聴いてくれて非常に助かったということもあります。式が終われば葬儀は終わったようにも思いますが、火葬場というのは、遺族の感情が大きく動く場所です。火葬炉にご遺体が入って、拾骨の前までというのはいろいろな感情の起伏があります。それでも、拾骨の段階になると、ちょっと吹っ切れた明るさのようなものが現れたりします。しかし、その後、親戚が帰り家族だけが残されると、そこでガクンと気持ちが落ち込んだりします。七日ごとでなくても、行って話を聴いてくれる人がいるだけで違うと思います。儀式というのはそういうところで初めて意味を持ってくるのだと思います。やっていることの違いではなくて、係わる態度の問題だと思います。

■遺族に寄り添うということ

フランスの哲学者のジャン・ケルビッチが、死を「一人称の死」「二人称の死」「三人称の死」と三つに分類しました。

「一人称の死」というのは自分の死のことです。アルフォンス・デーケン氏が「デス・エデュケーション」を「死の準備教育」と訳されていますが、それは、自分の死を考えて生きるということです。「死」の問題では自分の死がとかく問題にされがちですが、究極的には「一人称の死」は体験できません。

「二人称の死」というのは近親者の死です。そこには大切な人を亡くしたという喪失感があります。阪神・淡路大震災の時、亡くなったのは人だけじゃないと言われました。暮らしそのものが無くなった。だから、人間の死というのは、単に物理的な死ではない。その人との暮らし、重ねた生を喪失する。近親者の死とは、自分の一部の死でもある。近親者は本人の死で終わらず、死後のグリーフを体験するのです。

「三人称の死」というのは、関係のない人の死です。たとえば、外に行って交通事故などで見た死。「かわいそう」だと思ったりしますが、現場を離れれば、それ以上、感情的に動かされることはありません。

高度経済成長期、葬儀が間違った方向に進んだと私は思っています。それは、葬儀が三人称の死を主体とするものになってしまったということです。統計で見ますと、バブル景気の絶頂期には、全国平均で三〇〇人の人が葬儀に集まりました。その中で、亡くなった本人を知っている人は三割です。あと七割の人は亡くなった本人を知りませんから、悲しみもありません。家族は悲しむ当事者なのに、その七割の人の接待を強いられました。こういう葬儀がいま疑問視されてきています。

葬儀の場で、僧侶である皆さんには遺族を支える役割があると思います。

遺族に寄り添っていくということが大切な事であると思います。第三者だから出来ることもあると思います。かつては隣近所の方が葬儀に係わることで、遺族を支えてきたということがあります。いま地域社会が後退してきてますから、僧侶の方々に求められるところは、ますます大きいと思います。

■お寺が無くなる

質問　『寺よ、変われ』（高橋卓志氏、岩波新書）という本を読みました。その中に確かニューヨークタイムズだったと思いますが、日本の仏教の問題点として、寺が消えていくということが書いてありました。その原因は、お寺が家族経営となっていて、後継者がいないということでした。地方でお寺が無くなれば当然お寺との関係を持たない人が増えてくる訳で、仏教離れというのは地方も真剣に考えなければならないと思います。それと、キリスト教会での葬儀が増えていくということは考えられますか。

碑文谷氏　お寺が七万七千カ寺あると言っても、その中で自立できているのは多くても四割だと思います。これから消えていくのではなくて、もう既に自活できていないお寺が多いのです。ですから、地域とか富山県全体でとか、そういう単位で、お寺というものをどうしていくのかを考えなければいけない時期に来ていると思います。お寺というのは、そこにお寺があるだけでなくて、人がいる訳ですね。そこに真宗であればご門徒さんがおられますね。そういうことを踏まえて、お寺をどうしていくのかに取り組んでいかなければいけないと思います。

■都会の寺に繋ぐ取り組みを

そしてもう一つ提案したいのは、これから東京や大阪に出て行かれる門徒さんや、既に出られていてもご縁がある方に対しては、皆さん方から、都会のお寺に繋いでいくことをやらなければいけないと思います。もう遅いくらいかもしれません。次男、三男だから、娘だから出て行ってもいいんだ、ではなくて、やはり都会のお寺に繋いでいく。出て行った人を地域に繋げ、また都会でも寺に繋がる仕組みをお寺は工夫していかなくてはならないと思います。いま都会に出た人は根無し草になり、そっくり宗教的浮動層を形成しています。

また、これからの団塊の世代以降は、無宗教葬が多くなると思います。今までは亡くなった親のための葬儀でした。しかし、自分たちが葬られる立場となったら、「無宗教葬でいいよ」と言い出す可能性が高いです。人気というのは三割を超えると一気に増えていきます。直葬というのはいま実に危ういところに来ています。二〇年後には無宗教葬が充分な市民権を得て、仏教で葬式することも選ばれる時代になるかもしれません。

教会での葬儀が出てくるかもしれないと言われましたが、それはないだろうと思っています。チャペル式結婚式はうけましたが、あれはファッションとして受け入れられたのです。宗教としてキリスト教が受け入れられたわけではない。人の死を受け止める場合には、その生活そのものから家族、暮らしを受け止める覚悟が必要です。お寺が地域に生きてきたから葬儀を頼まれたということがあります。残念ながらキリスト教はそこまでいっていません。全人口の一％ですからね。お寺にはお寺の強味があるわけで、そういうところを生かしていく。葬儀をファッションにしてはおしまいだと思います。「死ぬ」という事実にみんなが相対する。私は葬儀社に「変な演出をして〝感動させる〟などという余計なことをせず、一つの部屋に柩と一緒に家族を閉じ込めて、外から鍵をかけてしまうほうがよっぽどのサービスになることがある」と言います。そうすると遺族は嫌がおうでも死、死者に相対するだろう。これは極論ですけどね。それくらい考えないといけないほど、葬式の空洞化が進んでいると思います。

■お寺が僧侶のものになっていないか？

質問　「この僧侶にお経を読んでもらわなければ往生出来ない」というご門徒がいなくなったということだと思います。ということは、そういう風に言わせる僧侶がいなくなったということだと思います。今日、人と人の繋がりが、どれほど希薄になってきているのかということを、僧侶自身が気づいてないということが、一番大きな問題だと思います。それは、葬儀がどうなる

かということよりも、真宗の教えは間違ってないのに、伝える僧侶が力不足で、念仏の教えを伝える僧侶がいなくなったということを、将来、親鸞聖人の前でご報告しなければならなくなるような気がしております。

碑文谷氏　私は、お寺は葬儀や法事のためだけにあるのではないとは思います。しかし、現状、葬儀や法事をやらなければ、財政的にお寺を支えられないことは一般的事実です。ただ、葬儀というのは単なる儀式ではなく、人が死に、それを家族がどうとらえるかという大切な場です。こういうことについて、そもそも大方の教団においては、僧侶を教育するプログラムがありません。これは問題だと思っています。僧侶というのは、葬儀をたくさんやっているから葬儀の専門家なのかと言えばそうではない。その体験に学ぶ人もいますが、そうではなくアマチュアに留まっている人も多いと私は思っています。そういう肝心なことを勉強しないで、現場に行って葬儀をやらされる。そして戸惑う。そこできちんと勉強できる人と、何も勉強できない人に分かれてくる。僧侶を見ていても、人材のばらつきを感じます。自分のお寺というだけじゃなくて、皆でカバーしあいながらお寺を作っていくことを考えないと駄目じゃないかと思います。

最近、よく聞くのが「檀家を辞めたい」という話です。ある意味、檀家の人、門徒の人は寺に墓をもつことで、墓質（はかじち）に取られているのでしょう。僕は「辞めたら」と言いますよ。「別のお寺を探してきて移ったら」と。「信教の自由は保障されているので檀家を辞める権利はある」と。これは乱暴な言い方ですけど、墓質に取っている意識だと門徒さんの気持ちも離れていきます。

お寺を見ていて感じるのが、「お寺が僧侶のものになってしまっている」ということで、違和感を感じます。やはりお寺というのは、先程の二階堂先生の「信仰共同体」という言葉がありましたが、共同体であれば、門徒さんと一緒につくっていくものだと思います。特に真宗は世襲ということもあってか、とんでもない勘違いの権威主義者が出てくる時があります。寺というのは住職だけで保てるほど軽いものじゃないと思います。例えば門徒さんに弁護士がいるとか、税理士さんや専門の職業を持った人がいますでしょう。そういう人たちの手を借りれば、門徒の方のさまざまな悩みにアドバイス出来ることがあるんじゃないでしょうか。もっと門徒さんの力を利用することを考えたらいいと思います。私も様々なお寺に関係してきましたが、「あ、このお寺いいな」と感じるお寺は、そこに檀信徒の方の姿があるとか、あるいはネットワークが出来ています。住職だけがやっている訳じゃないというお寺が僕はいいと思いますね。

質問　先生はキリスト教徒とお聞きしましたが、すでに、ご親族の死におあいになられていると思います。そうすると、ご自分の体験されたキリスト教の葬儀について、こうしたほうが良かったなとか思われることもあると思います。それで、もし自分が亡くなって、子供たちにこうしてほしいという葬儀がありましたらお聞かせ下さい。

碑文谷氏　私はキリスト教でもプロテスタントです。私も父を亡くした時には全く感情のコントロールができませんでした。息子が僕の服を後ろから引っ張って「やめろ、やめろ」という状態になりました。私の父の場合は、元牧師として赴任していた教会（牧師は定住せず移動し、教会員に牧師の罷免権、承認権があります）の、父の時代に作った納骨堂に納骨するときに、父がお世話になった方たちと一緒に礼拝をしました。その後、来ていただいた方に一言ずつ父についての話をしてもらって、それを家族が聴くという形をとりました。出席者は良いと思ったかはわかりませんが、家族としては、あれはよかったなあと思っています。

自分の葬式については、後輩に牧師をやっている者もいますが、仏教の各宗派に僧侶の仲間がいますので、その仲間にも来てもらって、お経の一つでも読んでもらえたらなと思っています。子供たちは混乱すると思いますが。

いずれにしろ、同輩は死んでいるかもしれないので、後輩にやってもらおうと思ってます。それはどこの宗教とか限らない。仲間に送られたいと思っています。こちらの勝手ですけど。

■人間の死を具体的に考えていく

質問　ここ数年、テレビや出版物などを見ていますと、死というものを意識

したものが非常に多くなってきています。青木新門さんだったと思いますが、バブルの頃には、死について考えることを活字にして出しても、なかなか受け入れられなかったという話を聞いたことがあります。しかし今日では、死について多くのところで考えられる時代になってきたなと思います。具体的には、「おくりびと」「余命一カ月の花嫁」「象の背中」、また「千の風になって」などが思い出されますが、これらは、宗教では無い形で、宗教というものを除外した形で取り上げられ、露出してきているなと感じます。こういう時代になってきたのかなとも考えますが、その背景となっているものは一体何なのか。メディアの影響は大きいと思いますが、それ以外のところで、「死」というものが露出され、考えられるようになってきた背景について、お考えをお聞かせいただければと思います。

碑文谷氏　青木新門さんの『納棺夫日記』をもとにした映画「おくりびと」がヒットし、アカデミー賞を獲得したことで、本も大ヒットしました。よく指摘されますが、あの映画の中にはお坊さんが誰も出てこなかったということです。「千の風になって」もそうですし、要するに、宗教が関与していないということです。それでも、ようやく死というものがいろいろなところで考えられるようになってきた。「おくりびと」を見た人の多くが、自分の近親者の死と重ねて観たことで心の琴線に触れたということがあったと思います。今まではどちらかというと、ケガレ意識もあり、死を横においておき、触れないという雰囲気がありましたが、人間感情の重要な面で死がとらえられるようになったのかと思います。

ただこれをスピリチュアルブームと重ねて考える人もおられて、東大の島薗さんなんかは特定の宗教から離れた「スピリチュアリティ」という形で捉えています。要するに、既存の宗教がそういう点を捉え損ねてきたということですね。

かつては、葬式というものには、ある程度、仏教的な民俗的な背景を下にコンセンサスがありましたが、今は非常に分散していると思います。そのため仏教を媒介に死や葬式を考えにくくなっている。イメージとしてはありますが。

だから自由な感覚で死をとらえたほうがわかりやすいという点があろうかと思います。では仏教から完全に離れていくかといえばそうではない。お寺が人々の自然な人間的感情を包み込むことで、期待に応えることができるのではないかと思っています。

■信頼関係の回復を

私の知っている寺を紹介させていただきます。その寺の檀家さんの前で、僕はある時一般的な仏教寺院の悪口をさんざん言ったのですが、全く受けませんでした。東京の消費生活センターなどでは大うけなのですが。ということは、そこの檀家さんはそのお寺に対して不信感を持っていないんです。みんなそのお寺に、死後だけでなく生前も託そうと思っているんですよ。何が良いかと訊くと、みんな「住職が良いから」と臆面もなく答えるんです。そこの宗派が良いからじゃなくて。本当にウチはここのお寺に決めたんだから安心という意識なんですね。これは、昔はあっちこっちのお寺で見られた姿だと思います。だから、時代が変わったから、もうこういう関係を作れないということでなく、きちんと係わっていけば、お寺と檀信徒、門徒との関係が、生きた関係になっていく、回復していくと思います。そういう意味では、僕はまだ可能性はあると思います。

そのお寺を見ていますと、檀家さんが生き生きしていますね。古くて雨漏りしていた本堂を新築しました。それは住職が言って造り替えたのではなく、檀家さんの方からそろそろ俺たちの代でやっておかなければならないと発起されました。お金も割当制ではなく、皆で自由意思での寄付を募りました。ある人は身寄りがないので、遺言で三千万円遺贈されました。そのお寺に対して、自分たちは本当に信頼しているからお金を出した。

その新築披露に私も行きましたが、檀家さんたちが大喜びしていました。自分たちのお寺という意識なのです。

法事や葬儀だけに財政的な基礎を求めるのではなく、みんなでお寺を支えるように少しずつでもしていかないと、次の代の方が経済的にも非常に苦しくなると思いますね。

随分勝手なことを申しまして失礼いたしました。

（了）

提言

御遠忌を迎えるにあたって ⑪

願いを受け継ぎ、そして手を携えて

教区坊守会長 第九組 樂圓寺 高山 礼子

日々の暮らしの中で、寺に住むことのさまざま、今の時代は？ 隔離された空間、進んでドアを開けないと閉ざされた場所。そこで生活をしています。それで何か変わりはありますか？ 袈裟をつけ、寺に住む者の顔をみせます。当たり前、当然わからなくなります。どのように生きてきたのでしょう。地域との関わり、今も寺を大切にしてくださいます。でも・・・無関心、興味無い、爺、婆の世代、少子高齢化、何かこれでいいのですか。身の置き場がありません。これで本当にいいのですか？ いつも追い立てられています。

アルツハイマー型認知症と診断された母との関わり、どうにもなりえないこと、本当に辛く悲しいです。避けることに時間を費やしています。阿弥陀様の前でお念仏、母と共に唱えることができる？ 南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛・・・無理です。お寺に何年住み、何を聞法してきたの？ と、思いもよらないことを考えます。ふと吉崎御坊の嫁おどしの話を思い出しました。お念仏にどのように出遇ってきたのか、お互いに譲れないものをもっています。教えを共に聞くことさえ出来ない。認知症という病気、怖いです。自我の崩壊、心を失っていく姿、虚しくてどうにもならないのです。長く生活を共にし、築いてきたことが何もかもはじめに戻り、ゼロにはならない出発点、この事実が私の生きる課題です。そのことを背負いつつ、今日に至っています。

坊守会に関わり、教区、組の役員を引き受け、多くの坊守さまと共に学習会や研修に参加し、研鑽してまいりました。豊かな知識、あふれる個性、意欲的で何時も感心していました。それは、今も同じ気持ちです。寺に嫁いで三十五年、おかげさまで何よりも多くの坊守さまとのご縁で、よくここまで育てていただいたと感謝しています。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に向けて、坊守会連盟は五十二年目の歩みを進めています。カウントダウンも始まりました。おそらく、今度の御遠忌が唯一のご縁ではないかと思います。大切なご縁に、共に御影堂につどい、坊守としての更なる出発点になればと考えます。

一昨年は、教区・別院の蓮如上人御遠忌と宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け法要が勤まり、富山別院の御修復と、多くの方々の熱い意の中、無事に法要を終えることができました。

法要に向けての準備と当日の執行体制業務。坊守の皆さまの力は大きなものであったと自負しています。御遠忌法要のテーマ「差異（ちがい） つながり・・・そして いのち―孤独の闇から響きあう世界へ」。そして宗派の御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」。今、あらためて、わたしに願われているもの、そして、これまで歩みを続けてこられた多くの坊守の方々の願いをしっかりと受け継ぎ、一人でも多くの坊守の皆さまと共に手を携えて歩んでまいりたいと思います。

また、今年九月八日から九日まで、北陸連区坊守研修会が富山教区当番で開催されます。これも教区坊守会の皆さまのご支援、ご協力を得なければできないことと思います。講師には加納実紀代氏をお迎えし、「寺をひらく 私をひらく―『私』を歴史に聞く―」のテーマで開催されます。近代の女性史を学び、私の生き方を教えの中に問うてみたいと思います。そして何がみえてくるのか、まず私を知ることから、確かめていきたいと思います。

是非、ご参加いただきますとともに、お力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。

富山教区登高座作法講習会を開催

二月二十二日～二十六日

本年二月二十二日から二十六日の五日間、「富山教区登高座作法講習会」が開催され、二十二人が受講した。

登高座作法講習会は、内陣仏事における経導師及び式導師として必要な読法その他の作法を習得し、その許可を受けることを目的に開催されたもので、富山教区では七年ぶりの開催となる。

伝授師には大谷修鍵役、教授師には釋氏昭彦本廟部定衆があたり、二十二日から二十五日までは、釋氏昭彦氏による講習が行われた。

二十二日は「式文・嘆読文」の読法作法講習が行われ、講義では、全体と個別の読法講習が行われた。講習に先立って、釋氏昭彦氏から、式文・嘆読文は表白であり、本来は、個々に書写するものであるとおさえられ、本山蔵版についてはあくまで練習用であることを教えられた。今日、様々なところから書き下しのものが出てきており、なかなか、個人で書写することがなくなってきているが、式導師として臨む上での心構えをお話しいただいた。

二十三日から二十五日にかけては、登高座作法の講習が行われたが、一人ひとり個別に、時間をかけて講習をいただいた。今回は、二十六日の伝授日（考査）を除き、午後からの日程で予定されていたが、全ての受講者が伝授証を受けられるようにと、午前中には補習が行われ、結局、二十二日を除いて終日の講習となった。

このたびの講習会は、許可を得ることが目的ではあるが、講習を受けることにより、今後、仏事に臨むことの意義や緊張感を感じることが出来たのではないか。

「教区及び組の改編」について考える

「教区及び組の改編」についての富山教区説明会　四月十四日

教区同朋会議「教区及び組の改編を考える―宗祖御遠忌後を見つめて」　六月二十三日

去る、四月十四日、「教区及び組の改編についての富山教区説明会」が開催された。

「教区及び組の改編」の取り組みの経緯としては、二〇〇四年「宗務改革推進委員会」からの最終報告に基づき、二〇〇四年度「教区及び組の改編に係る機関設置に関する条例」が施行され、これに伴い、宗務所に「中央改編委員会」、教区には「教区改編委員会」が設置された。そして、中央改編委員会において改編についての基本的な考え方及び十五教区改編試案が作成され、教区改編委員会に示された。しかし、教区内に改編の趣旨等が充分に伝わっていないとの教区改編委員会の判断から、このたびの説明会開催となった。

当日は、中央改編委員会から釜田弘章委員（高岡教区）、大橋秀暢委員（京都教区）のお二人にご出向いただき、説明をいただいた。全体討議では、教区及び組を改編することによって本当に教勢を回復できるのか。別院の問題を差し置いて教区改編の議論は出来ないのではないか。教化活動がしっかりとできるような改編を考えていただきたい。などの意見が出された。

なお、六月二十三日には、「教区及び組の改編を考える―宗祖御遠忌後を見つめて」をテーマに教区同朋会議が開催され、教区及び組の改編について改めて討議がなされた。

仏青づくり研修会 in 富山

五月十八日・十九日

去る五月十八日・十九日、「仏青づくり研修会 in 富山」が、酒井義一氏（東京教区存明寺住職）を講師にお迎えし、大谷派仏教青年同盟の主催により開催された。参加者は三十二名。

仏青同盟は「単位仏青の設立」「一ヶ寺一仏青」を基本の願いとしている。その中で、さらにこの研修会は、自分の言葉で語り合える場と仲間づくりを願いとしている。さまざまな人と集うことの楽しさや、自らの言葉で気持ちを伝えていくことの大切さを、同じように求めている人と出会うこと。そして、そんな場や仲間を作っていきたいと動き出せるきっかけとなることを願い、開催されている。

今回、酒井氏には「大切にしたいこと」という講題でお話をいただいた。その中で、場を作るにあたって七つの大切なこと（心がけていること）を挙げ、自分に言い聞かせるように活動しているというお話を聞いた。

一　動きながら学ぶ
二　聴くことからはじめる
三　自分の言葉を持つ
四　時代社会の課題を担い続ける
五　悲しみのすがたを知る
六　ひとりを見いだす
七　学び続ける

五班に分かれての座談会では、活発な発言が聞かれ、「仏青って何？」「具体的な活動内容は？」「作らなきゃいけないの？」など意見が出され、それらを丁寧に話し合った。

私自身の感想として、人が変われば仏青の姿も違う。我々は自分なりの「仏教」「青年」「会」、いうならば自分たちの仏青を開き、求めていくしかない。

第十組　唯見寺　神保　孝順

解放運動推進協議会・あいあう会 主催
「靖国問題」を再考する

六月十四日　講師　高橋哲哉氏

教区解放運動推進協議会と「あいあう会」の主催で、六月十四日、別院本堂において、靖国問題学習会が開催されました。蒸し暑い日にもかかわらず、大谷派僧侶以外の方も多く聴講に来場されていました。講師は『靖国問題』などの著者で知られる、高橋哲哉氏（東京大学総合文化研究科教授）で、「靖国問題を再考する」と題してお話しいただきました。

講義では、靖国神社が、当時の為政者達によってつくられた「感情の錬金術」を行う装置としてはたらいていたこと、そして靖国思想をもって感情を操作することにより、人間の思考を奪い押さえつけてきた歴史的事実を、当時の「靖国の母」とよばれた人たちの手記などを通して明らかにされていました。

また、戦時下においては、大谷派教団も例外ではなく、戦時体制に組み込まれながら、靖国思想を積極的に支持する動きが当時の教団の有力者の言動の中に見られることも示されました。

もちろん、当時の教団や社会を、現代に生きる私たちが現代と見比べながら単純に批判することはできません。しかし、現在において、靖国神社という形を取るかどうかは別として、国による戦没軍人の追悼施設を存在させることに疑問がはらわれることがないことを思うとき、二度と間違いを繰り返さないために、今後どう生きていくのかを歴史に学んでいく姿勢が、期待されていると感じました。

第十組　永宗寺　永崎　暁

教化日誌

（二〇一〇年一月一日～二〇一〇年六月三十日）

1月

19日 親鸞聖人に遇うつどい講師学習会（第一回）
23～24日 青少年のつどい
26～27日 共学研修会旅行

2月

8日 教区御遠忌委員会総会
17日 親鸞聖人に遇うつどい講師学習会（第二回）
18日 教区解放運動推進協議会（高橋哲哉氏DVD鑑賞）
22～26日 教区登高座作法講習会

3月

2日 富山・高岡教区教区会議員懇談会
4～5日 秋安居
【講師 福島光哉氏】
15日 ボランティア研修会報告会
【報告者 神保孝順氏】
16～17日 解放運動推進協議会研修旅行（鹿児島県知覧他）
23日 親鸞聖人に遇うつどい講師学習会（第三回）

4月

6日 住職総合研修（第二回）
【講師 松尾剛次氏】
12日 親鸞聖人に遇うつどい講師学習会（第四回）
14日 「教区及び組の改編」についての教区説明会

5月

1日 五一会（第十組当番）
6～7日 四州会（富山教区当番）
11～13日 第十八回真宗同朋の会全国推進員交流研修会
【講師 玉光順正氏・田原由紀雄氏】
18～19日 仏青づくり研修会in富山
【講師 酒井義一氏】
20日 人生講座（第一回）
【講師 加田岡隆昭氏】
20～21日 北陸連区保護司研修会（富山教区当番）
21日 救命講習会
【講師 富山市消防局】
29日 保育研修会
【講師 鹿島和夫氏】

6月

2日 富山刑務所参観
6日 第九組お待ち受け同朋大会
【講師 真城義麿氏】
12日 第十組お待ち受け同朋大会
【講師 今泉温資氏】
12日 第十三組お待ち受け同朋大会
【講師 秦 信英氏】
13日 第十二組お待ち受け同朋大会
【講師 春秋 賛氏】
14日 靖国問題学習会
【講師 高橋哲哉氏】
17日 人生講座（第二回）
【講師 堀部 直氏】
17日 第十一組お待ち受け同朋大会
【講師 蓑輪秀邦氏】
18日 教区声明講習会
【講師 西山恵紹氏】
23日 教区同朋会議

教化リーフレット『宗祖親鸞聖人に遇う―本願に帰す』を発行

社会教化小委員会より、リーフレット『宗祖親鸞聖人に遇う』が発行されました。

このリーフレットは、『宗祖親鸞聖人』（東本願寺出版部）の各章の法語から、私たちのありようが問い返されてくることを願いとしており、今回は第五章の「本願に帰す」をテーマに発行された。

※ ご希望の方は教務所までご連絡ください。

編集後記

先日、テレビを観ていたら「シューカツが中高年の間で密かなブームになっている」と言っていた。婚活でもなければ就活のことでもない。「終活」である。つまり、人生の最期をどう迎えたいか。延命治療はどうするのか。葬儀はどうしたいのか。お墓はどうするのか等々、そういうことを書き残しておくエンディングノートというものがある。遺言状より手軽で遺族に詳しく伝えられるそうだ。確かに良い方法だと思うが裏を返せば安心して死んでいけないということだろう。遺族に、そしてお寺の僧侶に任せておけないということではないか。安心して死んでいけないから終活をする。

この安心できるように尽くしていくことが寄り添うことであり、それを行うのが身近な家族なのだと思う。しかしその家族だけでは不十分なのだろう。そこで手助けしていくのが僧侶の役割ではないかと私は思う。

第九組 永源寺 島倉 慶晃